

# 日本における二胡の初心者教授法

山本 宏子 ・ 劉 飛\*

本論は、中国の民族楽器である二胡（アルフー、にこ）を、日本という異文化のなかで、効果的に教える教授方法を構築するための基礎研究である。

日本と中国では、初心者の状況が異なる。そのために、中国での教育方法では、日本の学習者には適していないので、日本の初心者のための独自の教授方法が必要であるということがわかった。

二胡の歴史、二胡の構造的特徴、二胡の演奏技法などの基礎データを収集し、中国の模倣を中心とした教授方法とは異なる、理論的な解説を中心とした日本人向けの教授方法を確立した。

Keywords：中国 二胡 生涯教育 調弦 演奏

## 第1章 はじめに

### 第1節 研究の目的

本論は、中国の民族楽器である二胡（アルフー、にこ）を、日本という異文化のなかで、効果的に教える教授方法を構築するための基礎研究である。

日中両国の文化交流が深くなるに従って、中国の音楽も海を渡って日本に伝わってきた。中国の民族楽器である二胡も、例外ではない。1990年代になると、日本のテレビやラジオなどのバックグラウンド音楽として、二胡が使われるようになった。二胡の音は日本人の心を捉え、二胡を学ぶのがブームになり、二胡教室が生まれた。特に2003年、二胡を主旋律楽器とする「女子十二楽坊」というグループが日本に進出して以来、二胡を学ぶ人がますます増え、短期間の内に日本全国に二胡教室が広まった。

筆者劉飛はこの潮流のなかで、2001年から日本に留学し、岡山大学大学院教育学研究科で学びながら、文化交流の一端として二胡を教えていた。ところが、二胡を始める日本人は多いが、継続する人は少なかった。なぜこのような状況が出てくるのだろうか。劉は、中国では江西省歌舞団の二胡奏者であ

り、また、江西省文芸学校（現在の江西省職業芸術学院）の楽器演奏学科で、非常勤講師として二胡を教えた経験もあった。二胡の実技教育の実績は充分にあると考えていた。では、なぜ、日本では、学習効果を上げられないのであろうか。本論は、この問題の原因を探り、日本人向けの新たなカリキュラムを構築することを目的としている。なお、本論は、山本宏子の指導の下に劉飛が執筆した修士論文が基となっている。

### 第2節 研究の方法

研究の方法は、実際に二胡を学んでいる日本人にインタビューやアンケートをおこなうことで情報を収集し、現状を分析するという方法を採用した。対象としたのは、筆者が教えている二胡教室の生徒である。さらに、2005年に設立されたNPO日本二胡振興会の理事（2007年1月現在19名）にもインタビューをおこなう。筆者もその理事の一人であるが、理事たちは日本全国で教えているので、日本全国の二胡教室の状況を聞くことができると考える。

日本と中国との教授方法の比較をするために、中国北京の中央音楽学院民楽系の二胡教授である劉長

---

岡山大学教育学部音楽講座 700-8530 岡山市津島中3-1-1

The Teaching System of Chinese Instrument "erhu" to Beginners in Japan.

Hiroko YAMAMOTO and Fei LIU\*

Department of Music Education, Faculty Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Okayama 700-8530

\*The Joint Graduate School (Ph. D. Program) in the Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education. Shimokume 942-1, Kato-city, Hyogo 673-1494

福（リュウチャンフウ）氏と、上海民族楽団二胡首席演奏家でNPO日本二胡振興会の名誉会長でもある閔恵芬（ミンホォイフェン）氏に、中国の教育現状と二胡の基本知識について、インタビューをおこなった。

さらに、日本で二胡の演奏活動をしているプロの中国人演奏家の状況も把握するために、現在日本で活躍している陳敏（チンミン）氏などにもインタビューをおこなった。

### 第3節 二胡の歴史概観

二胡に関する歴史は、現在のところ、全面的に解明されているわけではない。おおよそ以下のようなことが分かってきている。二胡の前身は、「胡琴（フウチン）」と呼ばれている弦楽器だとされている。時代を経て、様々な変容が起り、現在の二胡の形状になった。二胡は、その前身である胡琴も含めて考えれば、中国の古い民族楽器の一つでといってもよいであろう。今まで一千年ぐらいの歴史を持つといわれている。

隋唐時代、中国の北方民族の奚（シィ）の人々は、歌と踊りが大好きで、よく歌舞をおこなっていたという。伴奏の楽器として弦楽器である「奚琴（シィチン）」を使っていた。しかしながら、奚琴は、竹片で作られたもので奏する「弾弦楽器（タンシエンユエイ、弾いて奏する弦楽器）であって、二胡のような「拉弦楽器（ラシエンユエイ、弓で擦って奏する弦楽器）」ではなかったと考えられている。

宋代の音楽理論家沈括（シンクオ、1031年－1095年）は『夢溪筆談』巻五の『凱旋』の中で、「馬尾胡琴隋漢車、曲声独自怨单于、弯弓莫射雲中雁、如今歸雁不寄書」という一首の詩を載せている。ここでは、馬尾で作った弓で胡琴を演奏していたことが明らかである。

胡琴はもともと戯曲と歌の伴奏楽器の一つとして、民間音楽の合奏のなかで使われていた。今日至るまで改良が繰り返され、音色と音域と演奏方法がさまざまに異なる胡琴類が出てきた。たとえば、京劇で使われる胡琴類は京胡という。昆劇では南胡、広東音楽では、潮州音楽では二弦と呼ぶ。北方書鼓という戯曲音楽で伴奏として使うのは四胡と呼ぶ。四胡は弦が4本あるために、この名称が付けられた。これらの楽器のなかで南胡の指のポジションと演奏技法、そして音色が、二胡に最も類似している。そのために、中国の南方地方では、二胡のことも南胡と呼んでいる。京胡は二胡とは、まったく音色が異なる。現在の中国では「胡琴」という場合、もっぱ

ら総称として使われている。

19世紀、1890年代になると、中国の有名な民族音楽の演奏家であり研究者でもある劉天華（リュウテンホア、1895年－1932年）が、いつも伴奏として使われていた胡琴類を独奏楽器にまで昇格させた。これが、現在、我々が二胡と呼んでいる楽器である。劉天華のおかげで二胡は、大学の音楽学科の課程でも取り上げられるほどの専門的な楽器になった。もともと二胡は、街角の民間芸人が合奏するときの楽器の一つであったが、今では立派なステージで独奏演奏としても演奏されるようになった。劉天華は、二胡の演奏技法を様々に改良し、西洋のバイオリンの技法なども取り入れた。これらの技法を練習するために、練習曲の作曲と技法の説明をアカデミックな視点でおこなった。もともと二胡の調弦は、劇種によってさまざまあり、劉天華は独奏楽器として教育し易いように、内弦をd、外弦をaに調弦することを定着させた。新中国が成立した1949年以来、中国民族音楽の音楽家を多く輩出した。彼らは、二胡のための作品を数多く作曲した。おかげで、二胡の独奏曲のレパートリーが豊かになった。

劉文金（リュウウエンチン、1937年－）は、河北省唐山市に生まれた。彼の二胡に対する貢献は、劉天華に次ぐ評価を得ている。60年代から二胡のための多数の大型独奏曲を作曲した。たとえば、『豫北叙事曲』『長城随想曲』などがある。なかでも『長城随想曲』は、西洋音楽のように4楽章形式を取っている。第1楽章は「開山行」、第2楽章は「烽火操」、第3楽章は「忠魂祭」、第4楽章は「遥望」で、この曲のなかで、さまざまな二胡の演奏技法を使ひ、二胡の表現力を徹底的に引き出している。

1949年以降現在まで、中国の民族音楽の発展にはさまざまな困難があったが、最終的に二胡の表現力とレパートリー、技法は非常に豊かになった。二胡は、現代の中国の民族楽器のなかの重要なものの一つとなった。特に近年、中国は民族素質教育を重視しているので、大学・高校・中学校・小学校でも、中国民族楽器である二胡を学習するようになってきた。

さらに、国際化の流れのなかで、国際交流の手段として二胡を使うことも多くなってきた。その一つの現れとして、現在の日本での、二胡の愛好者の増加を上げることができるだろう。最近では日本の「演歌」音楽の伴奏のなかにさえ、二胡が使われていることがある。

中国でも「女子十二楽坊」のように、中国の伝統的な音楽様式に留まらず、西洋音楽の様式も取り入

れた演奏をおこなうようになった。二胡の歴史は、現在からまた新しい局面を作りつつあるといえる。

## 第2章 二胡指導のための知識

### 第1節 二胡学習の基本条件

二胡を学習するためには、聴音能力とリズム感が重要である。二胡は左手指で弦を押して音程を定めるが、ピアノのキーボードやギターフレットのように、押す目安になる標識がない。しかも、バイオリンのように弦の下に指板があるわけではなく、中空で弦を押さなくてはならない。すべての音程は、自分の左手指をコントロールすることによって、生み出される。もしも、聴音能力が弱いと、自分で出した音程が、正しいか正しくないか聞き分けることができないので、左手を正しくコントロールすることができない。それは、二胡を学習することによって、大きな障害になる。そのために、音高に対する聴音能力があることが、二胡学習の基本条件の一つである。

また、指の長さや掌の大きさも、二胡の学習条件の一つである。指は長い方がよく、掌は広い方がよい。なぜなら、二胡は指先で弦を押すので、指が長い方が弦を押さえ易いからである。また、掌が広いほうが、跳躍進行の音程が取り易い。特に初心者では、この二つの条件はとても重要である。なぜなら、初心者は二胡を演奏するとき緊張して、掌がなかなか開かないし、指の間もなかなか開かないので、正しい指の運び方ができない。中国でも、指が長いほうがリラックスし易く、学習に適しているといわれる。中国では、指が短か過ぎる人は、二胡の学習には向かないので、他の楽器を勧めることもある。

理想的な左手の形は、中指の長さや掌の幅が同じがよい。関節が自然に良く曲がる。指先に肉が良く付いていづほうが良い。もしも、指先の肉が少なければ、爪が弦に当たりやすく、正しい音階を弾くためには障害となる。

リズム感も、とても重要な要素である。周知のように、二胡を演奏するとき、さまざまなリズムが入ってくる。特に中国の二胡の楽曲では、ポピュラー音楽や西洋音楽のように固定リズムではなく、自由リズムを使うことが多い。二胡の独奏曲では、旋律が感情の変化に伴って、急に速くなったり遅くなったり頻繁にする。たとえば『江河水』では、半分以上の旋律が、自由リズムになっている。この時は、楊琴などの伴奏者と合わせることが難しい。お互いのリズム感が一致しないと、崩れてしまう。そのた

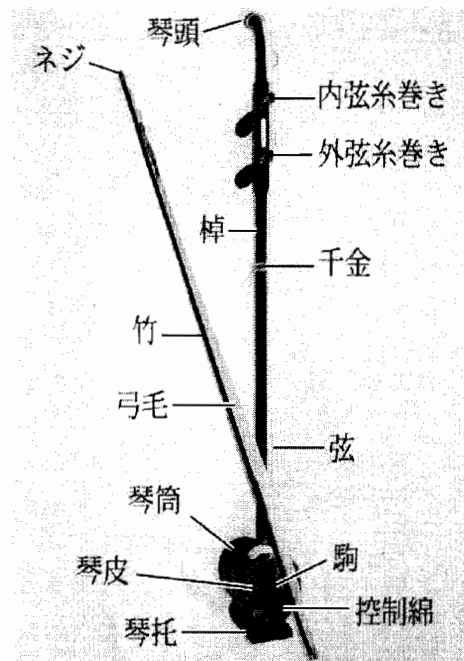
めに、リズム感が良くなければ、曲のイメージを表現することは難しい。二胡と楊琴のリズムがぴったり合わなければ、その演奏の表現力が弱くなる。リズム感とは二胡の学習にとって重要といえる。

以上のように、身体的特徴ももちろん考慮に入れなければならないが、最も重要なことは、学習によって技術を後天的に身に付けることである。

### 第2節 二胡の構造

二胡を指導するにあたって、楽器の特性を理解するためには、その構造を把握しておかなければならない。

二胡は、琴胴（チントン）・琴皮（チンピ）・琴碼（チンマ）・制音墊（ツーインテン）・琴杆（チンカン）・琴軸（チンジョウ）・琴弦（チンシェン）・千斤（チェンジン）・琴弓（チンコン）・琴托（チントオウ）・琴頭（チントウ）などの部分から成る（写真1）。



(写真1) 100%

琴胴は木製の共鳴胴である。共鳴胴の形は現在3種類ある。六角形、円柱、そして前方が六角形で後方は円柱となっているものである。共鳴胴の形によって、音色と音量が微妙に異なる。この3種を比べると、六角形の共鳴胴は、音が明るくて音量も大きい。前方が六角形で後方は円柱の共鳴胴は、音色は柔らかく音量も中ぐらいである。円柱の共鳴胴は、逆に音は柔らかいが、音量は小さい。

琴皮も音色と音量に大きく影響する。琴皮はニシ

キヘビの皮である。弦の振動が、琴碼（こま）を通して皮に伝えられ、共鳴同で音が増幅される。二胡の音色は蛇の皮によって異なる。

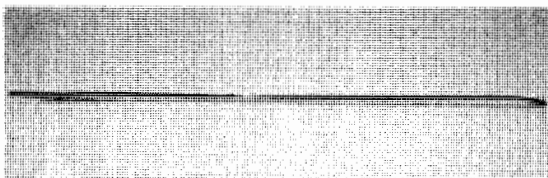
制音墊は琴碼の下に付けられたもので、材質は綿やフェルトのような弾力性のある布を使う。琴弦と琴皮の間に挟んで、雑音を吸収し、なめらかな音色になるようにする。

琴杆は二胡の棹のことである。琴杆の長さは約82センチである。琴杆は琴胴と同じように木で作られる。木の材質は紫檀・紅木・黒檀などが多い。琴杆の断面は、円柱または楕円柱をしている。楕円柱の琴杆は、抵抗力が強く曲がりにくい。たとえ弦を強く引っ張っても、形が変わることがない。そのため、現在の二胡製作者は、すべて楕円柱の琴杆を採用している。

琴軸は、琴杆の上端に付けられる。木製の糸巻きと金属製のネジの両方がある。内弦の琴軸の方が上で、外弦の方が下になる。琴軸は琴弦の調節をするために使う。

琴弦は、昔は絹弦だったが、最近では金属の巻弦を使う。絹弦は柔らかい音色を出すことができるが、切れ易い。演奏中に張力が変わるので、調弦が狂い易い。金属の弦は、音色が明るくて、音量も大きい。しかも、調弦したあと安定している。そのために、現代の二胡独奏では、金属弦をよく使う。現在中国で、北京・上海・蘇州などで金属弦を作っている。材質は微妙に違う。材質によって、音色と触感が異なる。演奏家は自分にあった触感で、好みの音色の弦を選んでいる。なお、内弦は外弦より若干太い。

千斤は琴杆の上部にあり、琴弦の振動を止める役目をする。千斤には、糸と木の両方がある。糸を使う場合は、糸で琴杆と琴弦を縛る。木の場合は、小さな木片を琴杆と琴弦の間に挟んで、琴弦を固定する。買った時についてくる既製の木片では、演奏者の手の大きさに合わない場合がある。演奏者の手の大きさというのは、当然いろいろあるので、木片を取り去って調節しやすい糸で結ぶことが多い。子供の場合は、年々成長に従って手が大きくなるので、たびたび調節できる糸を使うことが多い。



(写真2) 100%

琴弓（写真2）は、竹と馬尾の毛でできたものである。竹の部分は弓杆（グンカン）という。竹の材

質は、紅竹・江葦・鳳眼竹などである。現在は紅竹が多い。弓の長さは約82センチである。馬尾の毛は180本から200本使用する。毛は白いもののほうが良いといわれている。現在の弓には、持つほうの端にネジがついている。弓毛の張力を調節するためである。

琴托と琴頭は、二胡の装飾部分である。琴頭は龍や鳳凰の頭の形をしている。一般的に木で作られるが、象牙のものも多い。琴托は琴胴の下に付けられた装飾である。装飾の目的以外に、二胡の重さを増加させる役もしている。重いほうが、構えたときに安定している。

### 第3節 二胡の選び方

二胡奏者と二胡学習者にとって、良い二胡を入手することが夢なのは間違えないであろう。良い二胡というのは、音色が良いだけでなく、棹が滑り易いことが重要である。なぜなら、ポジションの移動がスムーズにできるので、音楽表現がし易く、自分の気持ちを表しやすいからである。二胡の素材や作り方によっては、工芸品として価値があり、非常に高価なものもあるが、音色と棹が滑り易さを選択基準の第一と考えるべきである。

良い二胡は、初心者にとっては、学習するときに無駄な雑音がでないし、手の形が安定しやすいという利点がある。学習者は良い二胡を入手すべきである。

二胡を選ぶ手順は、以下の通りである。まず、外見を見る。つまり、琴胴の形が重要である。前述のように、琴胴の形によって、音色や音量が変わるので、自分にあったものを選ぶ。

二胡の各部分、琴碼・琴杆・琴軸・琴弦・琴托・琴頭などとのバランスを見ることが大事である。もしも、琴胴が大きすぎたり重すぎたりすると、二胡の演奏が安定しにくい。琴軸とそれを差し込む穴が密着していないと、調弦がずれ易い。そのため、演奏の細かいところが狂ってしまう。

琴杆の太さや形が自分の手の大きさに合っていないと、触る感覚がよくない。

これらバランスを見たあとで、木の材質と作り方をチェックする。紫檀・紅木・黒檀のいずれの木で作られた二胡でも、木の年輪が平均して出ているのがよい。

作り方をみるためには、眺めているだけではなく、手に取って触ってみることが肝心である。特に琴杆、前述のように、とても大事な部分なので、手で触ったときの触感が滑らかなものが良い。琴軸は実際に

回してねじ込んでみて、密着ぐあいを確認する。きつ過ぎると、調弦するとき、なかなか回らず大変である。緩すぎると、弦が狂い易い。初心者にとっては、ネジ式琴軸を選んだほうがよいであろう。ネジ式琴軸は簡単に締めたり緩めたりでき、調弦したあとは安定している。学習者にとってはネジ式のほうが扱い易い。

琴皮を選ぶには、鱗の大きさと鱗の形をチェックすることが必要である。鱗の大きさは、小さすぎるものはよくない。凡そ直径5～7ミリぐらいものがよい。鱗の大きさが揃っていて、配列がきれいなものがよい。形は円のものがよい。皮の色は光沢があるものがよい。皮の厚さもチェックする。光に透かしてみて、明るすぎる場合は薄すぎる。光を通しにくいものは厚すぎる。蛇皮は厚すぎると振動がしにくいので、音がこもってしまう。速い曲を弾くときに音が鈍くなるので、演奏のテクニックに影響が出る。逆に薄すぎると雑音が出やすいし、しかも、気候の影響が大きくなる。湿気が多いと蛇の皮が凹みやすくなり、振動し難くなる。

以上、細かい点まで延べたが、最終的に自分で弾いてみて、他の二胡と比較することが重要である。同じ値段の二胡でも作り方によって、音色が異なる。同じ材質を使っても、蛇皮の張り方によって、音色が違う。同じ蛇皮でも張るときにきつすぎると、音が細くて明るい、緩すぎると音が鈍くなり、良い音色にならない。

楽器の本体を選んだだけでなく、弓を選ぶのも重要である。流暢に演奏するには良い弓が必要である。弾性のある弓杆で、重さは自分に合ったものを選ぶ。子どもの場合は、軽いほうが良い。琴杆と同じように、滑らかなものが良い。もちろん、前述のように、弓毛は白いものが良い。弓杆は、太さが均一の自然の竹で作ったものが良い。太さが均一でないものは、弾力性が弱いので、高度なテクニックを必要とする曲を弾くには向かない。現在販売している弓にはのなかには、そのように見えるように加工をしたものもあり、見ただけでは良い弓杆を選ぶのは難しい。竹の種類や節の位置によっても、弾力性が微妙に異なる。節が多くなると硬くなるので、ネジに近いように1つだけ節があるものが良い。竹の種類は、演奏者が自分の好みに合わせて選ぶことができる。

二胡を買うときに、中級や上級の学習者やプロの演奏者は自分の好みで選ぶことになるが、初心者ではできるだけ演奏し易い楽器を選ぶべきである。初心者は、上記のようなポイントを判断できる先生といっしょに楽器を買うほうがよいだろう。

#### 第4節 二胡の調節方法

二胡の調節は、二胡を演奏する人なら、誰でも必ず身に付けなくてはいけない技術である。新しく買った二胡は、そのまま良い音がでるわけではない。調節しないと、雑音が多く、それは演奏者の技術だけでは消すことが出来ないものである。中国には「工欲其善，必先利其器（コンユイチャーシャン、ピーシェンリチャーチ）」という諺があり、これは「自分の仕事を綺麗に仕上げたいのなら、まず自分の道具を使いやすいようにする」というような意味であるが、二胡の場合も同じである。二胡の調節方法は以下のとおりである。

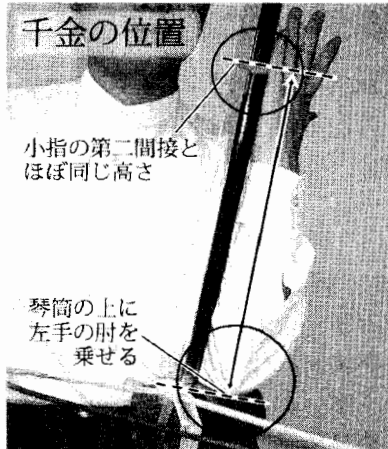
買った時には、一応琴弦が張ってあるが、自分で演奏し易いものに、取り替える。琴弦は、北京の「星海」「常青」、上海の「敦煌」「牡丹」、蘇州の「江南」、広州の「向陽」などのメーカーのものがある。これ以外にも、弦を作る専門家が自分なりの方法でいろいろなタイプの弦を作っている。琴弦の材質と太さの違いによって、音量が違い、指で弦を押した時の柔軟さが違う。指先が強い人は、あまり柔軟であらに弦に替えたほうが良い。人によって感覚が違うので、自分にあう琴弦に張り替えることが必要である。

人の掌の大きさと腕の長さによって、千斤の高さを調節することが必要である。または、指の太さと琴杆の形によって、千斤で琴杆と琴弦の間の距離を調節しなければならない。

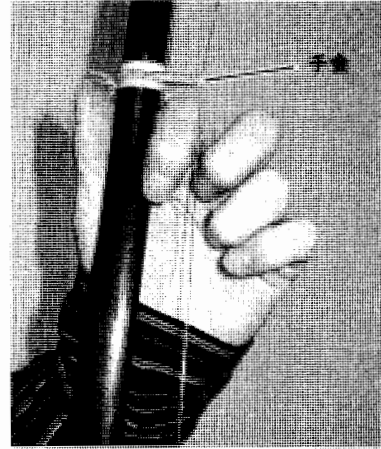
左手の肘を琴胴の上に乗せ、手首をまっすぐに伸ばして、だいたい小指の第2関節に合わせて、千斤の高さを決める（写真3）。または、円柱の琴杆の場合は、琴弦との間を少し広くし、親指が差し込めるぐらいにする。

楕円柱の琴杆の場合は、琴弦との間を少し狭くし、（写真4）のように人差し指が差し込めるぐらいにする。右手を正しい基本の形にして、リラックスした状態で、指で琴弦を押すことが出来れば、千斤の調節が完了したといえる。

琴碼の材料は、楓・松・松節木・紫檀・紅木など色々な種類があるが、楓・松・松節木がよく使われる。同じ二胡でも琴碼を替えると、音色が変わる。楓の琴碼は、音色が明るく音量も大きい。松節木のものは、音色が柔らかく音量は小さい。松は松節木と変わらないが、音量が多少大きくなる。紫檀・紅木は、音色は滑らかで美しいが音量は小さい。自分の二胡に相応しい琴碼を選択する必要がある。たとえば、琴皮がきつく張ってあるものは、松・松節木が良い。さらに、琴皮が厚いときは、松が相応しい。



(写真3) 100%



(写真4) 100%

反対に、琴皮が薄いときは、松節木が相応しい。琴皮が緩く張ってあるときは、楓が良い。琴碼は、琴皮の中央に置く。

制音墊は、琴皮と琴弦の間に挟むが、大きさと材質、置く場所によって、音色が変わる。大きすぎると、琴皮の振動を妨げることになる。小さすぎると、雑音を押さえる役割を果たさない。二胡の音を弾きながら、気に入った音色になるまで、何回でもフェルトの大きさを調節することが必要である。湿気が多い時は、くぐもった音色になるので、琴碼から少し離す。乾燥している時は、細くて高い音色になるので、滑らかな音色にするためには琴碼に近づけたほうが良い。

弓杆は、反りぐあいを調節しなければならない。弓を買ったら、まず両端を見る。ネジに近い方の曲がり具合によって、弓杆と弓毛の間の距離が、狭すぎたり広すぎたりする。弓毛が内弦と外弦に挟まれているので、広すぎると、内弦と外弦を交互に演奏しにくい。逆に狭すぎると、正しい弓の持ち方が難しくなる。弓先の曲がりぐあいによって、弓の弾力性が異なる。曲がる程度が大きいと弾力性が強くなる。曲がる程度は少ないと弾力性が少なく、硬くなる。そのため、自分の右手の大きさと、自分の望む弾力性に合わせて、弓の曲がりぐあいを調節する。蠟燭の炎で、曲げたい部分の外側から熱しながら、力を少しずつ加えて曲げる。ちょうどよいところまで曲げてから、冷水に付けると、固定できる。気をつけなくてはならないのは、炎を近づけ過ぎて、燃やしてしまわないことである。

二胡をいつでも良い状態に保つために、演奏の後に正しく保管しなければならない。二胡を綺麗に拭いて、ケースの中に入れる。特に、松脂が琴胴や琴弦や琴皮などに残っていないように、よく拭き取る。弦も定期的に交換する。年間2回ぐらい替える。1

弦だけ切れたとしても、2弦セットで交換する。エアコンの風が直接当たらないようにする。日本ではコタツの近くに置かないように注意しなければならない。春の湿気が多いときは、ケースに乾燥剤を入れるようにする。乾燥剤は決して直接琴胴の中に入れてはいけないようにする。

### 第三章 実技の教授方法

#### 第1節 姿勢

二胡の演奏姿勢を正しくすると、体全体がリラックスする。そのようなリラックスした姿勢で演奏すると、二胡の音程と音色が出し易くなる。二胡の演奏姿勢には、2種類ある。中国では站立式（チャンリーシー）と坐式（ゾウシー）と呼んでいる。つまり、立って演奏する立奏と、座って演奏する坐奏のことである。

二胡の学習においては、常に坐式で演奏する。なぜなら、二胡の学習は長い時間の練習が必要である。もしも立って演奏すると、体が疲れでししまうし、体がリラックスできない。練習の成果が上がらないことになる。中国では、練習の時は、立って演奏することはない。立って演奏するのは、プロの奏者たちが特定の状況のなかですることである。

たとえば、舞台の効果のために、日本でも有名な「女子十二楽坊」は立って演奏している。立って演奏すると、動きが出てくる。また、中国では民間芸能人、たとえば葬式の楽隊や結婚で嫁を迎えに行く楽隊では、演奏者たちは歩きながら演奏することが必要なので、当然立って演奏する。立って演奏するのは、二胡の演奏をある程度熟練した演奏者か、演奏レベルが高い人がおこなうものである。学習段階では、適正ではない。ここでは、座って演奏する正



(写真5) 100%



(写真6) 100%

しい姿勢について説明する。

坐式での二胡演奏姿勢を学習する前に、まず、自分にあった椅子を選ばなくてはならない。一般的に、椅子に座ったとき、両膝が90度になるような高さが適している(写真5)。

人によって足の長さが違うから、当然椅子の高さも違う。椅子に深く腰掛けるのではなく、前から3分の2ぐらいに腰掛ける(写真6)。背筋を伸ばして、上半身をやや前に倒す。この一点は、年配の生徒がするのはとても大変である。年配の人の腰は、若い人より疲れ易い。特に初心の段階では、リラックスする要領が上手くつかめていないので、正しい姿勢を維持しても、数分の間で崩れてしまう。そのために、年配の生徒に対して姿勢を教えるとき、中国でのように厳しくしないで、背もたれのある椅子を準備させる。そして、背もたれに届くまで深く腰掛け、腰を支えるようにする。そうすれば、レベルの高いテクニックはしにくくなるが、基礎の練習のときには有効である。

正しい姿勢を生徒たちが、すべてできるわけではない。前述したように、大部分の人は二胡を学習するに適しているが、中には適していない人もいる。適していない生徒に対して、中国では先生が他の楽器を学ぶことを勧める。しかし、そのようなやり方は、日本では通用しない。日本では、生徒の適性よりも、あくまでも本人の二胡に対する愛好心を満足させることが大事である。そのことについて、在日の中国人の教師のなかでは、問題だという意識を持つ人も多い。

大人の理解能力は子どもより高いが、体は子ども

のほうが柔らかい。大人に対して教えるときは、模範演奏よりは、適切な言葉や喩えで解説したほうがより効果的である。弓の持ち方を説明するとき、いくら写真を見せても、いくら教師が模範の姿勢を見せても、生徒が理解できていないと、上手く実行することができない。生徒に分かり易い喩えを考えて、「箸の持ち方で弓を持ってください」というと、年配者はほぼ100%正しく持つことができた。これに対して、同じ方法で子どもに説明すると、全員がそれなりの持ち方をするが、100%正しい持ち方とはいえない。なぜなら、現代では、正しく箸を持ってない子が多いからである。それでも、まったく間違った持ち方をするよりは、二胡の演奏にましである。しかし、これ以上に正しい持ち方を強制すると、緊張して、返って良くない結果になってしまう。この点からみても、正しく弓が構えられるようになることを絶対に必要と考える、中国での教授方法とは異なるといえる。

## 第2節 調弦

正しい演奏姿勢を習得したあと、開放弦の練習から始める。まずは、先生が生徒の使う二胡を正しく調弦する。正しい調弦で開放弦を練習すると、生徒の耳が二胡の音高を覚えることになる。

二胡の調弦は以下のとおりである。

二胡の調弦には、2種類ある。両弦を5度に調弦する。内弦の高さはd、外弦はaに合わせる。この調弦は、現代二胡の演奏における常規方式つまり基本調弦である。日本でも中国でも、二胡の教育現場

では、ほぼ100%に近くこの調弦をおこなう。ところが、曲を表現するため、特に民族性が強い中国の劇の曲、たとえば京劇の中では4度に調弦することもある。または、特別の曲目によって、常規方式の高さより2度あるは5度低く調弦することもある。たとえば、中国の二胡独奏曲『長城随想曲』は2度低く、『二泉映月』『漢宮秋月』などでは5度低く調弦する。初心者には、二胡の2度あるいは5度低い調弦については、知識として教えるだけに止め、実際に演奏を教える必要はないだろう。

二胡の内弦と外弦の調弦方法を知ったとしても、実際の調弦は音楽の経験がある生徒でも、すぐには正しくできない。なぜなら、二胡には次のような特徴があるからだ。言い換えるなら、これは二胡という楽器の短所にもなるのだが、外弦を正しく調弦しても、内弦を調弦すると、外弦の音程が狂ってくるからであるからである。もう一度、外弦を正しく調弦すると、今度は内弦の音程が狂う。中国の二胡の奏者でも、両弦を正しく調弦するためには、何回も繰り返しさなければならない。だから、初心者の生徒にとっては、とても無理なことである。演奏経験者でも、調弦の練習をしないと、すぐには出来ない。この問題を解決するために、現代の音響機器の力を借りて調弦の練習することができる。チューナーを使うと、正しい音程かどうか判断する目安になる印があるから、正しい音程になるまで糸巻きを繰り返し調節して、調弦の練習をすることができる。とはいってもチューナー頼らずに、できるだけ耳で音程を聞き分けて、調弦することが大事である。いつまでもチューナーに頼っていると、二胡の調弦の感覚が上達しない。

### 第3節 開放弦の練習

二胡を持つ姿勢が保てるようになったら、開放弦を引く練習が始まる。開放弦の練習の目的は、2つある。1つ目は、正しい弾き方で音を出すこと。右手をリラックスさせた状態で、柔らかい音を出すことができ、さらに強弱を付けることができることを目標にする。2つ目は、開放弦の練習しながら、生徒が数字譜について理解するように教える。二胡は、弓毛と弦をこすり合わせて音を出す。外弦を弾くときは、右手の中指と薬指で琴杆を外側に押しながら、弓毛で外弦を摩擦する。内弦を弾くときは、右手の中指と薬指で弓毛を内側に押しながら、弓毛で内弦を摩擦する。2本の弦のどちらから練習を始めてもよい。始めたばかりの音は、とても純粋な音とはいえない。綺麗な音色を出すために、以下の点を注意

して、繰り返し練習することが必要である。第1に、右手で弓を左右に移動するときは、弓の全体が直線的に移動するようにしなければならない。第2は、弓は必ず胴の上に乗せたままにして、宙に浮かないようにする。第3は、右手の腕はリラックスして、滑らかに動かす。中国ではこのような動きを「像魚尾的擺動（シャンユウイダバイトン：魚の尻尾のような動き）」と表現して、生徒に教えている。関節を楽な状態に維持する。第4は、弓の圧力と移動の速度との相関関係について、理解させる。筆者はそれを理解させるために、公式を使って説明する方法を考案した。その公式とは以下のようなものである。

$$A : B = 1, \quad A > B = \text{雑音}, \quad A < B = \text{掠る音}$$

Aは、弓毛で弦を押す圧力を表す。Bは、右手を左右に移動する速度を表す。弦を押す圧力と弓の移動の早さが、理想的な状態を「1」とする。つまり、圧力を強くしたら速度を速くしなければならないし、逆に圧力を弱めたらゆっくりすると、美しい音が保てる。AとBの比率が常に1になるようにするのが、理想的な弾き方である。Aつまり圧力が強くてBつまり動きがゆっくりだと、ギーギーというような雑音になってしまい、逆に、Aが弱くてBが速いと、シューシューというような掠れた音になってしまうということである。この点から、開放弦を練習するということは、すなわちこのAとBが正比例になるような、力と速度の加減を探すことにほかならない。これは、筆者が来日してから6年間にわたって日本人に教えた経験から考え出した説明方法である。筆者の知る限り、中国でも日本でも、このような公式を用いて開放弦の弾き方を教えている教師はいない。しかし、実際にこの公式を用いて教えると、日本人はすぐに理解し、美しい音をすぐに出せるようになった。なぜなら、前述したように、日本で教える場合は大人の生徒が多いので、理論的に説明をすることによって、理解を容易にすることができるのである。

### 第4節 数字譜に関する知識

中国では二胡の演奏家は、五線譜ではなくて、数字譜を使うことが多い、日本に来て二胡を教えている中国の先生たちは、習慣的に数字譜を使って教えている。ところが、日本では、数字譜を知っている生徒はほとんどいない。もしも、一気に数字譜の理論を教えると、生徒は完全に消化できない。そのために、二胡を教えながら、その段階にあわせた数字



譜の知識を、少しずつ教えたほうがよいと考える。そうすれば、学んだ知識を、すぐに二胡の練習で活かすことができる。また、数字譜だけを取り上げて、理論的に学ぶという生徒の学習の負担を減らすことにもつながる。これら点も、筆者が日本での教授経験から気づいたことである。中国では理論と実技は別々に教育する習慣がある。同じ先生が理論と実技を分けて、それぞれ教えるというやり方をとっている。さもないと、生徒は実技だけ先生から習って、理論は独学で知識を仕入れるというやり方をする。中国では、実技を教えながら、数字譜の理論も同時に教えるという方法は、慣習的になかった。中国では、初心者はほとんど子どもなので、理論的な説明をするより、先生の演奏を模倣させるという学習方法をとっているためである。もちろん、中国にも『基本楽理』つまり日本の『楽典』にあたる教科書もあるが、それはもっぱら音楽大学や師範大学の受験生が学ぶもので、子どもはそのような教材を使って勉強することはほとんどない。小学校の教科書には、多少の解説があるが、授業で取り上げることはあまりない。

譜例1のような旋律で開放弦を練習させるとき、生徒が知らなければならない音符の知識は、以下のようである。実技を教える際に、付随してこのような基礎知識も教えるべきである。

1. 4/4の意味は、四分音符を1拍として、毎小節のなかに4拍ある。音楽の経験のない生徒の中には、何が四分音符かという質問がでてくるが、何の記号も付いていない数字1つが、四分音符1つと呼んでいると説明をしている。
2. 数字の「1」の唱名は「duo」, 「5」は「so」である。
3. 「-」は、前の音を1拍分伸ばすという意味。「- -」と2つ付いていたら、2拍分伸ばす。
4. 「|」は、小節線を表す。

## 譜例1

## 開放弦練習

作曲 劉飛

4/4  
 1 - - - | 5 - - - | 5 - - - | 1 - - - | 1 - 1 - | 5 - - - |  
 1 - 1 - | 1 - 1 - | 1 - - - | 5 - 5 - | 5 - 5 - | 5 - - - |  
 1 - 5 - | 5 - 1 - | 1 - 1 - | 5 - - - | 5 - 1 - | 5 - 1 - |  
 5 - 5 - | 1 - - - |  
 (内弦の開放弦は1, 外弦は5)

## 第四章 おわりに

本論文は、社会教育における日本人学習者を対象とした、二胡の初心者教育をテーマにしている。中国と日本における二胡学習者の比較分析をとおして、日本における二胡の教育方法論を明らかにしたものである。

中国の二胡学習者は、子ども時代に入門するのが通常である。子どもは、理論的知識を得たいという欲求がほとんどなく、過度に理論を教えようとする、反発することもある。そのため中国では、先生は、二胡の実技を練習するために最低必要な知識を、子どもに与えるに留まっている。中国の子どもたちは、先生の模範演奏を耳で聞いて、そのまま模倣して繰り返し練習するという方法で学んでいる。筆者自身も8歳か18歳までの二胡学習経験のなかで、二胡の歴史や構造について教えられたことはない。大学に入って初めて、知りたいという欲求が強くなり、図書館などで資料を探し独学するようになった。

日本と中国とを比較し分析すると、初心者の状況が異なることがわかった。日本では、大人になってから二胡を始める人が多く、二胡に対する好奇心が強いために、理論的な知識を知りたいという欲求が大きい。この点が、子どもが初心者である中国と違う。そのために、中国での教育方法では、日本の学習者には適していないので、日本の初心者のための独自の教授方法が必要であるということがわかった。

そこで、二胡の歴史、二胡の構造的な特徴、二胡の演奏技法などの基礎データを収集し、どのように応用できるか分析し、中国の模倣を中心とした教授方法とは異なる、理論的な解説を中心とした日本人向けの教授方法を確立した。

唐の時代に日本に伝わった箏・尺八・琵琶・笛などは、長年の間に変容しつつ、今では日本の民族楽器となっている。中国の民族楽器である二胡も、これらの楽器のように、日中文化交流が深くなるにつれて、日本人にさらに受け入れられて、いずれ日本の楽器の一つとなるのではなかろうか。本論文で提示した教授方法が、日本人が二胡を受け入れるのに役立つことを望んでいる。

最後に、本論文を書くにあたって、中国北京の中央音楽学院民楽系の二胡教授である劉長福氏と、上海民族楽団二胡首席演奏家でNPO日本二胡振興会の名誉会長でもある敏恵芬氏、演奏家の陳敏氏に、さまざまご教示いただいた。この場をお借りして、深く感謝の意を表したい。

さらに、日本での二胡学習者についての情報を提供していただいたNPO日本二胡振興会の理事の皆様にも、深く感謝している。筆者が講師を務める二胡の教室の生徒の皆さんにもご協力をいただき、感謝したい。

## 引用文献・参考文献（ピンイン順）

- 劉長福  
2003 『跟名师学二胡』北京：国際文化出版公司
- 劉東昇  
1988 『中国音楽史図鑑』北京：中国芸術研究院音楽研究所・人民音楽出版社
- 1992 『中国楽器図鑑』済南：山東教育出版社
- 閔恵芬  
2004 『閔恵芬二胡芸術研究文集』上海：上海音楽出版社
- 武楽群  
2000 『日本人のための二胡教則本』東京：ドレミ楽譜出版社
- 楊興新  
2004 『二胡初級教本』東京：ヤマハミュージックメディア
- 張 前  
1999 『中日音楽交流史』北京：人民音楽出版社